

高

朋友

1991



東京電機大学高等学校同窓会

《表紙について》

本誌名の「朋友」は仲のよい友達とか友人という意味を持ち、英語での「FOR YOU」…（会員皆様方のための）という意味を持たせております。これは同窓会幹事会において鷺見篤氏よりご提言いただいたものです。

また、表紙の画は河部貞夫先生作のレリーフ「若者の像」を、本誌のため再度先生にデッサンしていただいたものです。もともとなったレリーフは、学園創立60周年記念に合わせて、同窓会で募金したレリーフ基金及び学園、生徒会の援助により製作されたもので、現在も小石川校舎玄関口右手におかれています。

小石川キャンパスを顧みて

東京電機大学高等学校校長 宮崎 登
東京電機大学高等学校同窓会名誉会長

卒業生の皆様には、日頃の母校に対するご支援ご協力に心から感謝申し上げますと共に、厚く御礼申し上げます。

高等学校は、昭和14年設立されて以来53年目を迎え、約25,500名の卒業生を送り出しています。この歴史の中の27年間に現在の小石川キャンパスで教育をすすめてまいりました。この間、約52,200名の志願者があり、15,381名の卒業生諸氏を送り出してきました。卒業生の皆様には小石川キャンパスの建設から現在に至るまで、さまざまな思い出が残っておられることと思います。

神田キャンパスから小石川キャンパスへの移転を振り返ってみますと、昭和36年10月に調査研究委員会が発足し、昭和38年3月理事会で正式に新校舎建設が決定され、翌年の昭和39年3月17日に起工式、ついで同年11月に体育館が着工されました。その後、建設工事は順調に進み、予定通り校舎は昭和40年3月31日、体育館は同年5月25日に竣工し、6月12日に本学園の関係者、生徒代表、工事関係者、ご父母、都内近県の中学校の先生方など約700名の参会を得て盛大に落成披露が挙行されました。

当日は朝から重苦しい曇り空で、式典が行われる少し前から、あいにく激しい雨となり、雨は1日中降り続きましたが、その雨に濡れたみずみずしい後楽園の樹々の緑と白亜の校舎がよく調和した光景は誠に印象深いものでした。

当時の新校舎は、敷地面積4128㎡、校舎延面積8726㎡、体育館1347㎡、更に校舎の裏側に約400㎡の生徒用ロッカー室を設備して昼夜間生徒約2700名分のロッカーを配置したものでした。

また、この小石川キャンパスの建設と並行して、当時高等学校教育に必要とされていた清里ノ家の調査が昭和37年10月開始され昭和39年2月に着工し、7月5日に竣工され、1年生全員を対象にした山ノ家教育キャンプが開始されました。

このように、昭和39～40年にかけて高等学校の



教育環境が大幅に改善されました。これらの事業に携わってこられた方々のご苦労に深く感謝申し上げる次第でございます。その後も隣接地の購入、3号館増設等さまざまな教育環境施設設備の改善を図ってまいりました。

卒業生の皆様には、この小石川キャンパスでの学校生活を通して、さまざまな思い出が残っておられることと思います。

高等学校はいよいよ来年3月をもちまして、小石川キャンパスに別れを告げ、21世紀に向けての教育を目指して小金井の新キャンパスに移転いたします。皆様の学び舎として多くの思い出を残した小石川キャンパスとの別れに当たり、卒業生、教職員が一同に会し、お別れ会を来る11月2日に実施する予定でございますので、多くの皆様にご参会いただけることを期待いたしております。

小金井の新キャンパスにつきましては、本誌後記に詳述されておりますように人間育成の教育の場としてふさわしいキャンパスであります。

これまでも、卒業生の皆様には小金井の新校舎建設にあたりましては、深いご理解とご協力ご支援をいただいておりますことに厚く御礼申し上げます。今後共、母校へのご支援をお願い申し上げますと共に、同窓会の益々のご発展をお祈り致します。

目次	
小石川キャンパスを顧みて	1
母校の発展と共に歩む同窓会活動	2
特集 小金井新校舎建設	
小金井新校舎の生い立ちと装い	3
21世紀に向けての教育空間	4
東京電機大学高等学校のあゆみ	10
クラス会連続30回の回想	11
クラブ紹介（バスケット部）	12
修学旅行の思い出	14
〔名簿〕歴代教員	15
現教職員	17
学校・学科・年次別卒業生数一覧	20
学校・学科・年次別担任・クラス委員一覧	23
同窓会の活動報告	30
同窓会会則	32

母校の発展と共に歩む同窓会活動

東京電機大学高等学校同窓会会長

大塚 忠 克

同窓会会員の皆様、教職員の皆様には、日頃より同窓会活動に深いご理解とご協力ご指導を賜わりまして、厚くお礼申し上げます。

平成4年4月には、母校も小金井新校舎に移転することになり、新校舎建設も順調に進んでいると聞いております。新しい校舎で新しい時代に対応した学校教育が行われることとなります。卒業生としては大変喜ばしく思っております。

母校は、神田校舎、小石川校舎、そしてこれからの小金井校舎と創立以来3度校舎を変えることになりました。そしてその都度、時代を先取りした教育方針と、先生方の努力によって発展してきたことは、私達卒業生にとって母校への愛着と誇りとなっています。

コンクリートに囲まれた神田校舎、緑に囲まれた小石川校舎、いずれも都心にあって交通の便が良く、同窓生が気軽に母校を訪れることが出来ました。高等学校同窓会も、その利便と卒業生の繋がり、学校教職員の全面的なご協力によって活動を続けてくることが出来ました。

小金井新校舎は緑に囲まれ、閑静で教育環境に恵まれた所にありますが、交通の便を考えると同窓生が今までのように気軽に母校を訪れていただくことが出来るのか心配もあります。そのためにも同窓会は、今後この小金井校舎を活動の場としていかなければなりませんし、そのための検討も必要となっているものと思います。

7月に開催した同窓会幹事会では、新しく同窓会会員となられる卒業生が同窓会活動や運営に参加していただくために同窓会会則の見直しと検討をすることが決まりました。また、時代に即した同窓会とするための検討もしていかなければなりません。特に、同窓会活動の在り方（現在、会則に基づいて年

一回の総会を高等学校の校舎にて開催し、別会場にて懇親会を行っているが、今後どのようにする



か）運営の在り方（幹事の選出について、又、幹事会の運営についてどのようにしたらよいのか）、今後の財政についてはどうか（生徒数の減少により、同窓会入会員も減少するため同窓会運営財政も減となるが）、校友会との関係については（校友会運営のための理事の選出をどのようにするか）、等々同窓会の運営方法全般について見直す必要があります。

今、上部団体である校友会組織においても、卒業生（校友会会員）の会員離れの問題について検討が進められています。

高校同窓会も活動を通じ、卒業生が気軽に母校に訪ねられるようにしていくことが大切であると思います。

同窓会の発展は、母校の発展でもあります。平成4年の小金井新校舎で開催予定の同窓会総会には、多数の同窓生が参加して母校を支援するようにしなければなりません。同窓会は、母校の発展のため微力ながらお手伝いをしていくつもりでありますので、同窓生皆様のご支援、ご協力をお願いするしだいです。

小金井新校舎の生い立ちと装い

小金井校舎建設本部長 菊 地 諒

法人が所有する全校地の有効活用を意図して発足した校地総合利用計画委員会（S62.12～）は、小石川将来計画高等学校問題について、「小石川校地はその面積が狭隘なことから、育ち盛りの生徒の教育環境としては不向きである」とし、「小石川校地の約4.5倍の面積を有する小金井校地を活用すべきである」との方針を打ち出した。また同委員会ののもとに設置された小石川問題将来計画小委員会（S63.3～）は中間報告の中で、「小金井校地に移転するときのお願い」事項としていくつかの要望事項を提示したが、これらは大筋において受け入れられ、小金井校地への移転開校ムードができて上がった。

以後理事会は、都所管の教育環境改善指導、将来校舎の建て替え時期を迎えたときのきびしい建築規制、ひいては教育充実への拡張性のなさ等も併せ配慮して、高等学校小金井移転のゴーサインを出した。時を移さず高等学校移転推進委員会（H元・4～）が設置され、平成4年4月高等学校の小金井校地へ全面移転を目指して教育方針の樹立と施設設備計画の推進に全力を画すことになった。また同年6月には総合建設本部の内部に小金井建設本部が設置され、山下設計事務所と協力して建物の設計が始まった。

建物の設計には基本理念を植え付けることが必要である。「東京電機大学へ進学する高等学校」のイメージを強調するアカデミックな風格。「21世紀を生き抜く」重厚でモダンな佇い。「国際化・情報化時代にふさわしい」シンボリックな表情、このようないくつかのデザイン上のコンセプトを盛り込んだ3つの設計案ができ上がり、日に日を重ね何度か推敲の結果、移転推進委員会と高等学校職員会議は一部に7階の理系シンボル館を配した5階案を採択した。

平成2年3月、高校採択案について理事会の承認を得た後、小金井校地近隣住民の方々へ説明会

という形式で建築計画を呈示しご協力を乞うと同時に、設計事務所を通じて小金井市と都の建築指導課へ建築許可申請書を提出した。いくつかの指導事項の中で問題点は2つ残った。駅からの通学路の混雑緩和と建物の高さ制限の問題である。これをクリアしないことには建築審査会でオミットされてしまう。設計事務所の読みが甘かったようである。通学路については即刻通行量の実態調査を行い、一般の歩行者が少ない時間帯に電高の始業時間を設定することで解決した。建物の高さについては、武蔵野の緑が散在する東小金井地区になじむよう棟高を20m以下で納めてほしいとのことであった（7階建案は28mの棟高になる）。指導に添わない訳には行かない。

建設本部がいちばん悩んだのはこの時期である。コンセプトを損なわないことを条件に設計のやり直しが行われ、学内同一手続きのもとにでき上がったのが現在施工中の建物である。シンボリックな建物を設けらることはできなかったが、建物全体にシンボリックな風格を生かすことに成功したと思っている。近隣対応的にも住民の方々に満足いただけた。建築審査会も無事パスし、再度学内外の諸手続きを済ませ、平成2年9月着工に漕ぎつけることが出来た。

現時点では躯体工事はすべて完了し、目下内外装・設備等残された施工を急ピッチで進めている。延床面積約17500㎡が一体化したため大きく堂々とまとまった教育棟。外装の瀟洒なタイル仕上げの中にエントランス上部のカーテンウォールが映える。内部平面的には廊下を取り込んで有効にかつ広くゆとりを持たせたホールとラウンジ。一点豪華主義でまとめられた清潔なトイレ。その他エアコン・AV等の設備も整った。

平成4年2月には充実した教育のソフトウェアを支えるに十分な、他校にひけをとらない校舎が姿を現すことであろうことを確信している。

21世紀に向けての教育空間

小金井校舎デザイン担当
(株式会社 山下設計 専門技師) 南 三 一 郎

小金井新校舎建設も、来年4月開校に向けて急ピッチで進められています。現在構造体部分が建ち上がり、新しい校舎の外観がほぼ判るようになってきました。

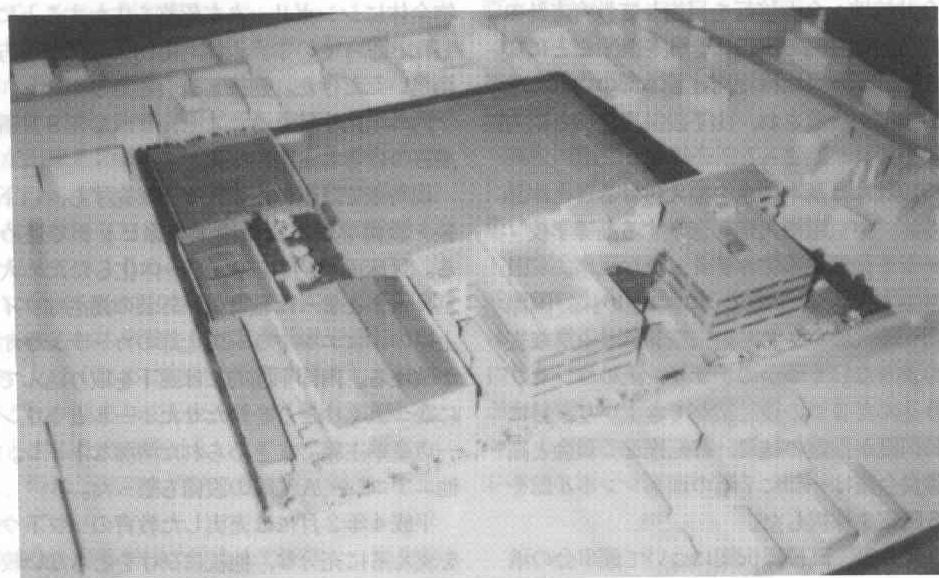
新校舎は、21世紀に向けて、より一層の教育空間の充実を図って計画されました。そこで、設計者の立場から、今回の計画の施設設計のコンセプトやプロセスを述べるとともに、新校舎に盛り込まれている教育空間の特徴を紹介したいと思います。

今日の急速な技術革新の中で、研究者、エンジニア、テクノクラート等の先端技術研究に携わる人材育成への要請は、増々高まっていくものと予想されます。そのため、教育内容の高度化、専門化の傾向が進むに従って、教育空間も高機能化の方向に進んできました。コンピューターによる個別学習システムや通信システムの導入に伴って、学校建築もまた、これら情報システムの進展に対応し、将来的拡張への余裕を含



建設前のグラウンド

間も高機能化の方向に進んできました。コンピューターによる個別学習システムや通信システムの導入に伴って、学校建築もまた、これら情報システムの進展に対応し、将来的拡張への余裕を含



小金井新校舎模型

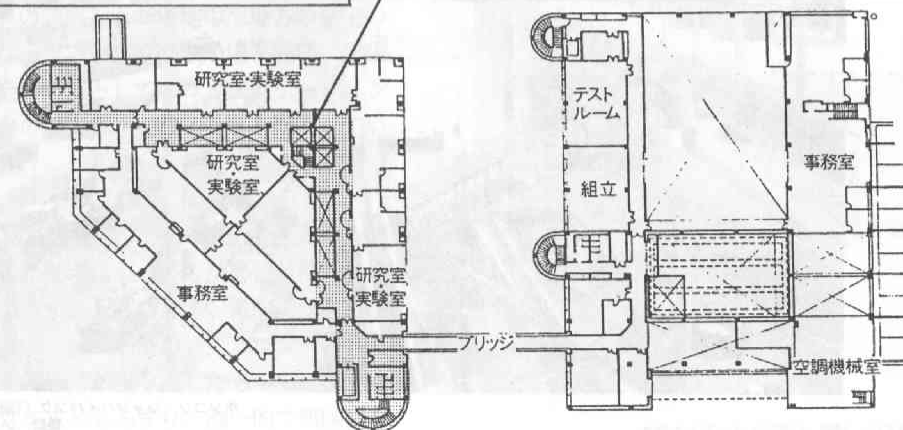


コミュニケーションゾーン

めたスペースやキャパシティの確保が重要なものとなっています。とりわけ、これらの情報機器や実験装置の大半を収容する特別教室ゾーンは、建築設備的バックアップを重視した機能空間化が進んでいます。

この施設は、世界最大の石油探査会社の研究開発センターとして、三角形の研究棟とL字型の試作棟により計画されている。学際的な高度技術を担う開発センターとして、諸機能を確保した先進的なオフィス形成を促すべく、様々な建築的配慮が施されている。働く人々の心を和らげる環境づくりのためには、L字型の中庭と前庭の2つの緑豊かな空間が配されている。さらに研究棟の中央部の廊下を段状にすることにより、開放的な印象の吹抜け空間を提供している。

コミュニケーションゾーン



2階平面図

しかしながら、学校建築を教育の場として捉えるには、装置化された入れ物としての施設計画のみでは一面的に過ぎます。今日のテレコミュニケーションの発展によって、確かに人と人との距離が近くなり、画面の中では世界の情報に触れられるほど、コミュニケーションの領域の拡大は目覚ましいものとなりました。ところが、一方では、それらが断片的であったり、選択的であったり、なにより人々の五感の一部に達するに過ぎないために、時としてイリュージョンの領域に組み込まれ、現実性を喪失する結果をも生んでいることは否定できません。

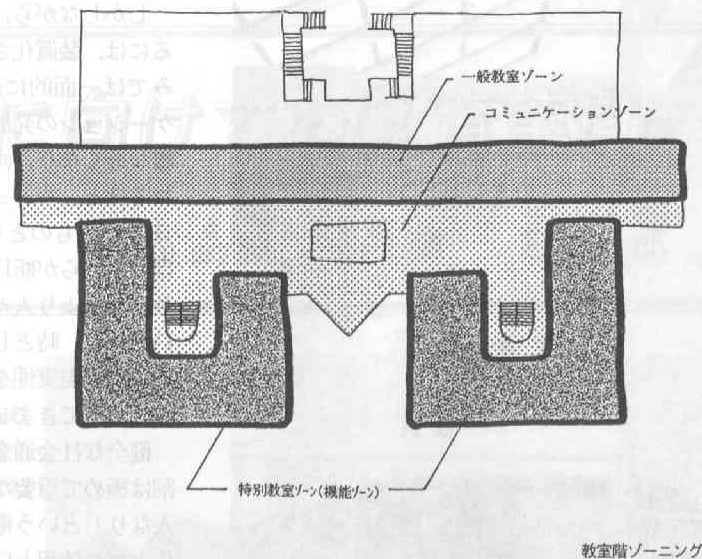
健全な社会通念を形成するため、教育の場の役割は極めて重要なものとなっています。「技術は人なり」という電機大学の教育方針は、正に記号化された情報という範疇でくれない個々の一人一人の生活や考え方、心象などを重視し、技術者として社会的良識を育成することが、現代社会における教育の責務をあらわしているものと考えられます。人々は集い、語り合い、体験を同じくすることによって共通のイメージを形成していきます。その過程の多くはソフト面によるものですが、ハード面における施設計画においても、生徒達が——人々がフェイス・ツウ・フェイスで集える空間的豊さが求められてきていると痛感されます。

従来の学校建築に対する批判の多くは、くし状に校舎の並ぶ画一的な施設計画と空間的ゆとりや魅力のなさ、小学校とも高等学校とも判然としな

い没個性へと向けられてきました。逆に言うと、今日学校建築に求められているのは、学ぶ者の心身の発達に応じた豊かな教育環境を作る、という極めてオーソドックスな条件に他なりません。

科学技術の先端を学ぶことになる人々にとって、様々な情報のインパクトに触れ、人々相互の情報の交流が活発に行われ、知的刺激を得る教育空間——そういった教育のソフト面をバックアップするハードウェアとしての豊かな建築空間——電機大学高等学校の新校舎のコンセプトは、居住空間と言える一般教室群と、機能空間と言える特別教室群を明快に分離したゾーニングとし、中央に高い吹抜空間を持つコミュニケーションゾーンを設け、人々の活発な情報交換と交流の場として機能することを願うとともに、教育の理念を表現するシンボル性を持たせることにしました。

このような空間構成の手法は、最新の研究施設の平面計画に類似しています。今日の先端技術研究所は、研究室を居住空間、実験室を機能空間として機能分化を行う一方、コンピューター操作等



によるテクノストレスに落ち入りがちで、情報の交換が各自の専門分野に傾ることの多い研究技術者のために、コミュニケーションやリフレッシュを行うアメニティ（空間的快適性）の高いスペースを中央に設けることが一般的となっています。

欧米の大規模インテリジェントビル（高度情報機器対応のオフィス、研究所）では、中央に巨大な吹抜の内部空間——アトリウムを設ける手法が定着し、日本でも、ここ数年アトリウムを備えたオフィスビルが数多く生まれてきました。アトリウムとは、2層以上に及ぶ吹抜け状の空間で、この吹抜空間に居室、廊下等の生活空間が面し、十



ホンコン シャンハイバンク（1985）内のアトリウム
設計 ノーマン・フォスター

分な高さ、面積により外部空間に近い環境を有する室内空間と定義されています。建物で働く人々の視覚的コミュニケーションを促し、相互の一体感を生み出すことに効果を上げています。しかし、より有効と思われるのは、都市の巨大化に伴い、都市の全貌を認識することが非常に困難となっていますが、今日の建築においても、その機能の複雑化、巨大化とともに、その傾向は顕著なものとなりつつあり、内部から人々の動きを追うことのできるアトリウムが、空間認識の一助となっていることです。

新校舎の内部吹抜は、アトリウムと言うには規模の小さい空間ですが、上部のガラス屋根から陽光の降り注ぐ、明るい、人々の集う空間で、機能的には巨大なアトリウムと同じ役割を担っています。生徒達の出入口のある2階は、教室群のメインフロアとなりますが、コミュニケーションゾーンの核となる空間とし、展示や集会など各種イベントに対応できる多目的スペースを中央に設けています。上部の吹抜を通して眺めれば、学校一体となった催しができる訳です。

アトリウムの語源ともなる地中海地方の住宅の中庭のような、家族が集う交歓の場と同様、学生を超えた出会いの場として、コミュニケーションゾーンが校舎のシンボルとなることを期待しています。

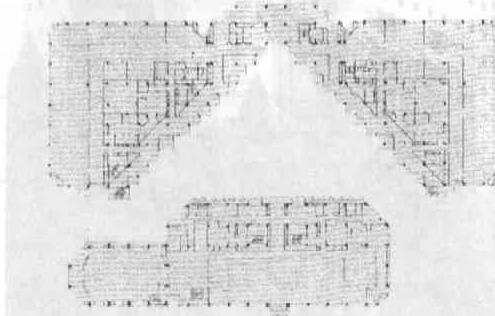
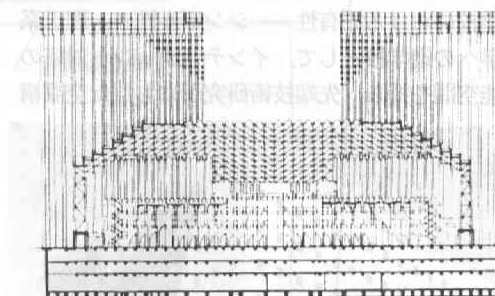
「形態は機能に従う」という近代建築の命題は、今日十分条件ではあっても、必要条件ではないとされています。人間活動の定量的側面を抽出した「機能主義」は、当時のテクノロジーの背景となった合理的思考が生み出したもので、より合理性、生産性を求めるあまり、画一的で無国籍な



ラーキンビル（1902）内部
設計 F・L・ライト

建築を作り続けてきました。それに対し、アメリカの建築家R・ヴェンチャーは「建築の多様性と対立性」で、B・ルドフスキーは「建築家なしの建築」の中で、それぞれ建築の多様性、風土性について述べ、モダニズム建築の画一性に対する批判を広げました。それ以後、建築のポストモダニズム（ポストモダン）へと流行が移行してきました。もっとも今日ではポストモダンさえも、バロック期の建築と同じく、建築家の作家性を追うあまりのデザインの袋小路的状况が取りざたされています。

モダニズムへの批判は、その思想に向けられたものではなく、狭量な合理性へと向けられたものと言えます。近代合理主義のもたらした科学的思考は、建築ばかりでなく現在の科学技術の根底となっているものです。従って、その延長上において、人間の定性的側面をも「機能」として捉える新しい「機能主義」の構築が必要と考えられるのですが、人間の感性に基づく事物（与条件——プログラム）の組立は、必ずしも一定の解をもつとは限りません。そのため今日の建築設計は、定量的機能を十分条件とし、プログラムの中にある個々の差異を読み取り、建築の個性、あるいは存在理由の必要条件を求めている状況にあります。



大森ベルポート（1991）設計 山下設計



スペインの穀物倉庫 B・ルドフスキー「建築家なしの建築」より

例えば、シンボル性という観念なども多様な側面をもっており、丹下健三氏設計の新都庁舎がこれ程話題を呼ぶのも、その形態が機能ならざる象徴性によって規定されているために他なりません。この時設計者は、都庁舎をオフィスビル——執務空間としての機能性が形態をまとうのではなく、TOKYOという都市の歴史や国際性や格式といった固有の顔を表現しようとした訳です。その中では、執務空間もエレベーターシャフトも同じ被覆を装い、形態が機能に従うという命題は、さらに上位の象徴性という機能に形態が従っていると言えます。

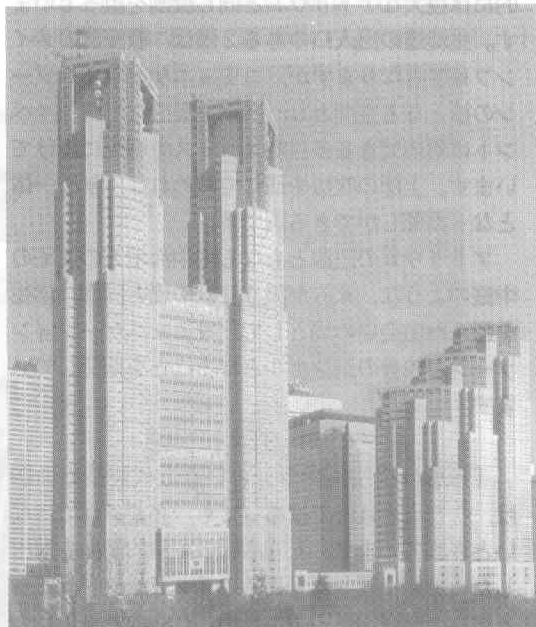
計画のプログラムの差異によって、建築には固有の顔が現れ、多様性が生まれます。電機大学高等学校における固有性——シンボル性は、理工系大学への進学校として、インテリジェント対応の機能空間を持ち、先端技術研究所にも似た空間構

成にあると言えます。形態的にも、街路に面した表情は、メインエントランスを中央に、左右シンメトリーの構成とし、格調や端正さの表現を図りました。

新校地は従来大学の研究施設及びグラウンドとして用いられていた場所で、桜の古木が沿道、校地内に並木を形成し、洞にはトビゲラの巣などもあり、付近の住民に永く親しまれてきました。校舎の配置計画に際しては、これら桜の古木を極力残しながら、敷地の有効利用を図ることがポイントとなりました。結果的には、やむを得ず校地内の約半数を伐採せざるを得ませんでしたが、残存する桜並木の一面を生徒の憩いの場として整備し、キャンパス内に武蔵野のおもかげを残していま



ポストモダンの代表作ポートランドビル (1982) 設計 マイケル・グレイブス

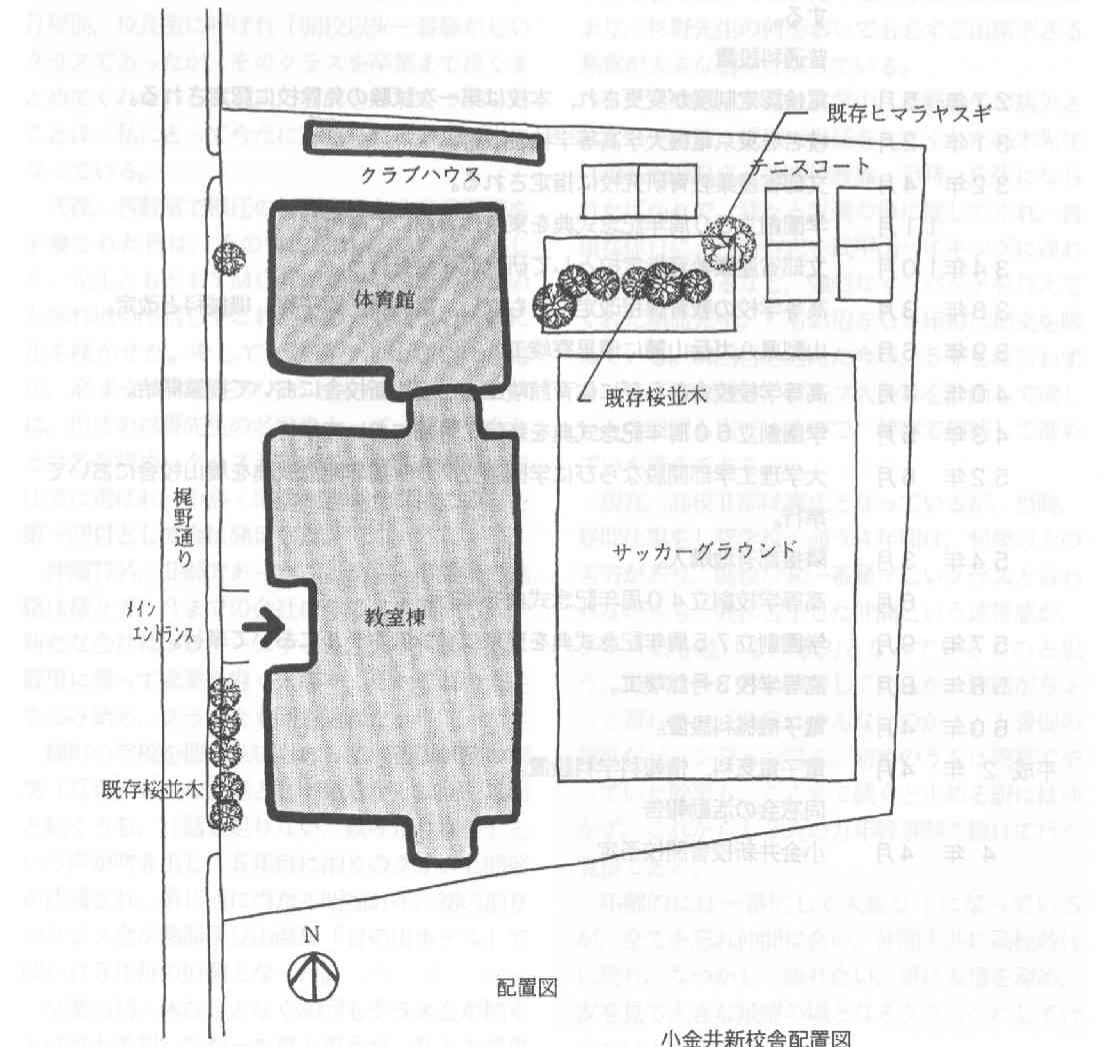


東京新都庁舎(1991) 設計 丹下建三

す。

校舎の構成は、1階に事務室、校長室、進路指導等の管理部門と、食堂、図書室、小ホール、会議室等の共用部門を設け、2階以上を教室群として明確に区分しています。1階エントランスホールは、グラウンド側に眺望の広がるゆったりとした空間で、図書室をガラス越しに臨んで、学校らしい雰囲気が演出されるよう考慮しています。生徒達の主な出入口は2階となり、先に述べたようにコミュニケーションゾーンの核として、多目的スペースが設けられています。また、図書室、食堂の上部は2階でテラスとなっており、グラウンド側のプラザから直接アプローチできる階段があり、競技や観戦や昼休みの歓談など、戸外の憩いの場として多様な使われ方が望ましい。

新校舎には、今までの高等学校の類型的な平面計画から発展した新しい空間が、いくつか仕込まれています。建築が人々の活動から形を定めていく一方、人々の生活や分化も、建築空間の中から生み出されていくと言えます。建物が使われていく内に、すなわち、人から人に受け継がれていく体験の場として、建築空間は原体験や心象風景といった、時と場所について、人々に共有のイメージを作り上げていく場でもあります。その意味で、新校舎がいかなる生活の場として定着し、いかなる想いをはぐくむことになるのか、期待感もあり不安感もありますが、使う人々——生徒達や教師の先生と共に、教育の場として成長して欲しいものと考えています。



小金井新校舎配置図

東京電機大学高等学校のあゆみ

小金井新校舎移転にあたり、母校の主な歴史をたどってみました。思えば長い年月ですが、皆さんはどの時代を学校で学ばれたのでしょうか。

明治40年 9月	広田、扇本両先生によって電機学校を創設。
大正13年12月	私設無線電信電話局JMYA認可される。NHK東京放送局の一般放送にさきがけて送受信を行う。
昭和14年 4月	実業学校令による東京電機工業高校を設置。 昼間部、夜間部の課程を置く。
19年 4月	校名を電機第一工業学校と改称し、別に電機第二工業学校を設置。
23年 4月	学制改革により、電機第一、同第二工業学校を合体し、電機学園高等学校とする。 普通科設置
27年 5月	電検認定制度が変更され、本校は第一次試験の免除校に認定される。
31年 2月	校名を東京電機大学高等学校と改称。
32年 4月	文部省産業教育研究校に指定される。
11月	学園創立50周年記念式典を東京体育館にて举行。
34年10月	文部省産業教育指定校として研究発表会を行う。
38年 3月	高等学校の教育課程改定にともない、電機科、電子科、機械科と改定。
39年 6月	山梨県八ヶ岳山麓に清里寮竣工。
40年 4月	高等学校校舎ならびに体育館竣工、小石川新校舎において授業開始。
43年 5月	学園創立60周年記念式典を新築7号館において举行。
52年 6月	大学理工学部開設ならびに学園創立70周年記念式典を鳩山校舎において举行。
54年 3月	隣接都有地購入。
6月	高等学校創立40周年記念式典を举行。
57年 9月	学園創立75周年記念式典を東京プリンスホテルにおいて举行。
58年 8月	高等学校3号館竣工。
60年 4月	電子機械科設置。
平成2年 4月	電子電気科、情報科学科設置。 同窓会の活動報告
4年 4月	小金井新校舎開校予定

クラス会連続30回の回想

昭和37年Ⅱ部電力科卒 石崎 泰 司

今年6月22日～23日、卒業してから一度も欠かすことなく続けている30回目のクラス会を、相模湖の近く陣馬山の麓にある温泉宿「陣溪園」で開催した。《右写真》

昭和37年3月、卒業式の行事が全て終わった後、当時、古く威厳のあったYMCAの地階で開かれた懇親会が、事実上の第一回目のクラス会となり今回まで続いているのだが……。

卒業の年は現在の大学5号館が建てられた年で、8階の体育館で昼夜合同の卒業式が行われた。この時の校長、清水明校長から卒業式の2か月程前、校長室に呼ばれ「開校以来一番騒がしいクラスであったが、そのクラスを卒業まで良くまとめてくれた」と卒業式の答辞をおおせつかったことは、私にとって今だに忘れられない思い出になっている。

式後、各教室で担任の杉野先生から卒業証書を手渡された皆は、そのまま別れるのが名残惜しく、先生ともどもYMCAに集まり、時の経つのも忘れ思い出話やこれからの人生について話に花を咲かせた。そして、誰言うとはなしに「毎年、必ずクラス会をやるんじゃないか」との声に、担任の杉野先生の名字をとって「杉の子会」と会名を決め、クラス委員であった私が連絡の責任者に選ばれ、中島・串橋両君をサブにこの日を第一回目として会は発足した。

仲間77名、Ⅱ部であったことから、卒業後の進路は様々で、今までの会社にそのまま勤める人、新たな会社にトラバユする人、大学へ進む人、郷里に帰って家業を継ぐ人等々、それぞれの人生を歩み始め、クラス会も回を重ねた。

錦町の学校を偲ぶ意味もあって、神田駅前の割烹「兵衛」を主な会場としているが、10回、11回と続くうち、「話し足りない、飲み足りない」という声が吹き出し、5年毎に泊りのクラス会開催が決議され、第15回に当たる昭和51年、初の泊りのクラス会が熱海伊豆山温泉「日の出ホテル」で開かれ5年毎の恒例となった。

卒業当初、休むことなく30回もクラス会が続くとは誰も予想しなかった事と思うが、私ども幹事



前列中央 杉野先生とその左側、高木先生、右側筆者

がここまで続けてこれたのは、仲間の意識はもとより、杉野先生の何をおいても必ずご出席下さる熱意が大きな励みとなっている。

また、20回目からは在学中、杉野先生が病欠された3年の時、代理で担任をしてくれた高木先生（現在新潟県立三条高校教諭：当時、先生になられたばかりで、我々と友達のように接してくれ、貴重な休日にクラス有志を武甲山ハイキングに連れていってくれるなど、強烈なインパクトを与えてくれた熱血先生。）もお招きし5年毎に旧交を暖めている。30回目を迎えた今年、5年とは言わず2～3年毎に開き、ゴルフ大会等を計画して欲しいとの要望も出ているので、幹事で相談して進めていく考えである。

現在、高校Ⅱ部は廃止となっているが、当時、昼間仕事をし夜学校へ通う4年間は、想像以上の苦労があり、開校以来一番騒々しいクラスと言われながらも、共に苦学した仲間という連帯感が、クラス会を続ける原動力となっているものと思う。毎年6～7月に開催しているが、連絡がちょっと遅れると「今年はやんないのか！」と督促の電話がジャンジャン鳴る。初めのうちは義務でやっていた幹事も、ここまで続く止める訳にはゆかず、これからも3人の万年幹事制で続けて行く覚悟である。

年齢的には一番忙しく大変な年になっているが、全てを忘れ仲間に会い、仲間と共に高校時代に戻り、なつかしく語り合い、更に友情を深め、友を見て大きな飛躍の場となるクラス会にして行きたいと考えている。

クラブ紹介

バスケットボール部について

部員一同

わがバスケットボール部は、大湯・古城・平川先生とOBのもと、楽しくかつ一生懸命練習に取り組んでいます。先輩と後輩の仲が良く、いつも楽しく活動しています。また、夏合宿や春合宿ではみんな気合いを入れて頑張っています。というようなことを書きましたが、結構和気あいあいと楽しんでいます。しかし試合の一日前になると結構燃えます。では、とりあえず部員の紹介をします。

部長“辻子”こと辻邦彦はちょっぴり名プレイヤーです。副部長“オノビョン”こと小野瀬淳也は試合中ビョンビョン飛んでいます。同じく“キョピー”こと石井潔はシュートが10本中20本ぐらい入るような名シューターです。次に“ゴトキ”こと三室哲はシュートが入ると調子にのってもう一本うっておとします。“師匠”こと鈴木則貴は、働かず怪我ばかりしています。“チョロ”こと野口正志は合宿で変態事件。“千葉っ子”こと千葉浩之はシュートを落とすと「アジャパー」トいます。最後に、“天才”こと村越誠司はスターです。次に一年生を紹介します。自称“キャプテン”こと磯部龍也は解析不能。“ヒョロ吉”こと萩原はひょろひょろしています。“ニエクリ”こと新倉はオニです。“自殺点男”こと池田は自殺点をします。“エテ”こと石川は

進化がはやい。“ガキンチョ”こと元杉は少年なので少しでも刺激のあることを言うと、キヤッキヤッキヤッキヤッと喜びます。

“サル”こと石橋は今頃ドリブルシュートの練習をし

てる。“お兄ちゃん”こと広島は、練習後水遊びをします。“ミクロクン”こと細田は、気が付くとぬかれています。“つつこんじゃうクン”こと志賀はつつこんでいきます。“走り屋”こと横田は将棋の歩兵です。

“働きマシーン”こと岩永はクラブの全仕事をします。

このように個性豊かな面々ですが、今は大会に向けて頑張っています。皆の個性を伸ばしながらいいチームにしていき、電高の伝統の一つにしていきたいと思っています。



現役の練習風景

バスケットボールで学んで欲しいもの

昭和60年度卒業 津久井 正明



1988年 春合宿

現在、バスケットボール部は、大湯先生、古城先生、平川先生に支えられ、生徒達も一生懸命活動しています。試合での成績は自慢する程良い成績ではありませんが、高校の部活動として勉学とスポーツを両立できるように、短い時間で効率の良い練習をしています。

合宿は年に2回春と夏に行い、ここでは普段の練習とは違い、集団生活をし、1日練習することによってチームワークを生み、生徒一人一人が技術的にも精神的にも大きく成長し、これからの人生に役立つようにして欲しいと思っています。

私は、高校を卒業して5年余になりますが、中

クラブ紹介

学、高校、大学とバスケットボールを続け、色々な事を学びました。特に心身共に成長する高校では非常に多くの事を勉強しました。それは、バスケットボールというスポーツが体力や瞬発力や知力などだけでなく、チームワークが何よりも大切であるという事です。このチームワークというのは、1日や2日で出来るものではなく、日々の練習によって作り上げられ、育まれていくもので、個々の努力が必要であると思います。そのためには、一人一人が常に相手の気持を考え、思いやり、信じる必要があります。私はこの事を高校時代に学び、今でも心の中に刻み込んでいます。

現在の生徒達にも私と同じ様な気持を持つ人が現れるか分かりませんが、バスケットボールを通じて、1つでも2つでも、心に残る事を作りたいと思います。

それから、来年度からは小金井に校舎が移転し



1985年 夏合宿

ますが、OBの方々には新校舎になっても、是非練習に顔を出して欲しいと思います。そして顧問の先生方も大変でしょうが、バスケットボール部のより一層の飛躍をお願いしたいと思います。

“生涯学習の糧として”

顧問 大湯 幸夫

いつも学校帰りが遅いと叱られながら続けた中学時代、早朝と昼休みの練習、放課後の試合で無我夢中で鍛えた高校時代、母校で後輩を教えた大学時代、そして本校に奉職し、生徒と共に汗を流し、試合での活躍を共に喜んで、精一杯走り続けた独身時代、もうバスケットボールを始めて何年が過ぎたのだろうか。自分でも数えるのが面倒な年齢に成ってしまった。その間、バスケットボールの「ルール」も何度も変わったが、生徒の気質も随分変わった気がする。東京オリンピックの頃は「根性」でやって来たが、最近は「豊かな社会」が到来して、所得水準の向上や余暇時間が増大し、「生活を楽しむ」ことや「心の豊さ」を求める考え方へと変わってきている。このような考え方の変化に伴い、『生涯学習』が叫ばれる中で、青年期に何か「一つ」打ち込めるものがあれば、生涯学習の糧と成り、私自身バスケットボールを続けて良かったと思っています。これも沢山のクラブOB・卒業生の御支援と電大高校の良い環境に恵まれたことに感謝しています。

顧問 平川 吉治

私は、本校のバスケット部の顧問になってから5年ほどしか経っていませんが、その間、多くの

OBと接する機会がありました。そして、その度にOBの皆さんの、バスケットボールを愛する心の強いことに、ある種の感動を覚えてきました。高校を卒業しても、大学で、職場で、地域でと、何かしらバスケットと関わっている方が多いのです。私たちの部も、やはり体育系のクラブですから、練習は厳しいものがあります。また、相手のある競技ですから、常に勝てるとも限りません。しかし、OBの方たちを見ていると、自分たちのそうしたつらいこと、苦しいことなどは、逆に良い思い出と変わっており、そしてそのことによって一層バスケットが好きになっているようなのです。

私も顧問としては、生徒に厳しいことも言いますが、心の中では常に、彼らにバスケットボールを愛して欲しいと願っています。生涯を通じて愛することのできるスポーツにめぐり合うということは、どんなに素晴らしいことでしょうか。私は、我々のバスケット部をレギュラーの者もそうでない者も、また、一度も公式戦に出られなかった者でさえも「自分は高校でバスケットボールという素晴らしいスポーツをやっていたのだ」と誇れるような、スポーツの厳しさや楽しさを教えていくクラブにしていきたいと思っています。

修学旅行の思い出

平成3年3月E卒 高橋 貞雄

《編集部より》

修学旅行は卒業後も思い出となって心にのこるものです。在籍年度によって、行先等もたびたび変更されてきました。そこで、ここ数年実施されている修学旅行を紹介する意味で、平成2年度工業科の卒業生に印象に残った場所をいくつかあげてもらいましたので、参考にしていただければと思います。

今から二年前の十月になりますが、東北への就学旅行の思い出話をしてみたいと思います。

上野から新幹線で盛岡まで行き、バスに乗り換え最初に訪れたのが小岩井農場でした。ここでジンギスカン料理で昼食となったのですが、男ばかりだとどうしても箸が肉ばかりに行ってしまった様です。また農場では新鮮な牛乳や牛乳を使って



〈小岩井農場にて〉

のアイスクリームも売っており、中には宅配便でアイスクリームを自宅に送る人もいました。

小岩井農場からのバスの窓からは、丁度見頃な紅葉がとてもきれいに見えました。

地熱を利用してタービンを回し発電を行う地熱発電所ではもう実際に運用されているそうで発電所のまわりには温泉が出ていたりしてこの辺りの



〈葛根田地熱発電所〉

自然の豊富さには驚かされました。

宿に着く頃には日が暮れかけており、宿の回りには早くも雪が少しながら残っていました。夜はなかなか眠ることができず、見回りの先生に見つからない様に夜遅くまで話し込んだり、先生の目を盗んで他の部屋に遊びに行ったりと、修学旅行でしか味わえない楽しさを味わいました。翌日はクラス毎に選択したコースをまわる事になり、私達は田沢湖の方へ足を伸ばしました。バスの中ではカラオケ大会となってしまう、大騒ぎをしているうちに龍子姫像の前に着いていました。湖のほとりに立っている金色の龍子姫像は、太陽の光でとてもきれいに見えました。ここで昼食となりここでは秋田名物きりたんぼの鍋を頂くことになりましたが、きりたんぼを煮過ぎてどろどろになってしまった人もいた様です。

三日目、岩手県の民芸品センターを見学しました。大きな南部鉄びんなどがあり、鉄びんの製作風景も見ることができました。また、南部せんべいをかなり手頃な値段で焼くことができ、ここには長い行列ができました。この頃になると全員がお土産を買い込んで鞆に入り切れず、紙袋に入れなければならない有様でした。

四日目は仙台、松島方面をまわりました。松島では遊覧船にりましたが、遊覧船のまわりにはうみねこが近寄って来ると残っているお菓子をカモメにあげていた人もいました。

また、遊覧船から見える島々は個性的なものばかりでした。ここでもお土産をかなり買い込んでいた姿をよく見かけました。

修学旅行の時の思い出を紹介させていただきます



〈松島にて昼食〉

したが、この他にももっと楽しい思い出が書き切れない程あり、とても思い出深かった楽しい旅行でした。

学校・学科・年次別卒業生数一覧

卒業 年次	電機第一工業学校				電機第二工業学校				小計		合計
	第1本科		第2本科	併設	第1本科		第2本科	併設	電機第一 工業学校	電機第二 工業学校	
	電気科	機械科	電気科	中学	電気科	機械科	機械科	中学			
	E	M	E	J	E	M	M	J			
S 17			89						89		89
18	51		85						136		136
19											
20	101		91						192		192
21	58		48						106		106
22			100		132	50			100	182	282
23	53		106	161	78	26	8	243	320	355	675
24	117	26	65	359	190	46			567	236	803
合計	380	26	584	520	400	122	8	243	1510	773	2283

卒業 年次	全 日 制									定 時 制						小 計		合 計	
	電 氣 科									電 氣 科	機 械 科	電 氣 科				全 日 制	定 時 制		
	電力課程				電氣機器課程		電氣通信課程		電氣計測課程			電力課程		電氣機器課程	電氣通信課程				
	E ₁	E ₂	E ₃	E ₄	M ₁	M ₂	C ₁	C ₂				I	E						M
S 24										94	10							104	104
25	54	52			64		39						42	44			209	86	295
26	48	48	51	49	52		45						49	47	27	60	293	183	476
27	51	50	50		46	43	53						40	46	50	37	293	173	466
28	56	57			51		50						53		38	64	214	155	369
29	50	37			62		55		29				49		41	39	233	129	362
30	55	53			36	44	54		38				55		30	40	280	125	405
31	55	49			59		58	56	33				50		28	57	310	135	445
32	52	54			49		59	60	38				73		41	51	312	165	477
33	56	59			55		63	63	48				55		36	64	344	155	499
34	61	66			62		51	54	60				49		41	44	354	134	488
35	56	59			52		60	65	56				59		48	54	348	161	509
36	62				55		61	60	52				67		51	60	290	178	468
37	62				64		61	64	66				73		65	65	317	203	520
38	58	61			67		63		60				70		57	59	309	186	495
39	60				49		56	53	54				62		53	55	272	170	442
40	65				65		63	67	57				51		35	58	317	144	461
41													47	47		52		146	146
合 計	1696				975		1433		591	94	10	1128		641	859	4695	2732	7427	

卒業 年次	全 日 制									定 時 制			小 計		合 計
	電 気 科			電子科		機械科		工業 計測 科	電 子 機械科	電気科		電 子 科	全日制	定時制	
	E ₁	E ₂	E ₃	D ₁	D ₂	M ₁	M ₂	I	M	E ₁	E ₂	D			
S 41	68	66		69	69	54		62					388		388
42	54	56	50	64	59	52		56		42	39	47	391	128	519
43	56	54		58	54	54		55		48	41	37	331	126	457
44	61	64		67	64	68		56		64		64	380	128	508
45	61	60		51	55	48	49			47		21	324	68	392
46	66	63		62	64	55	55			47		20	365	67	432
47	56	55		58	59	58	59						345		345
48	50	51		52	52	53	53						311		311
49	56	57		51	51	52	49						316		316
50	55	52		61	62	49							279		279
51	52	50		43	50	48							243		243
52	59	59		58	56	50							282		282
53	60	56		59	66	56							297		297
54	51	55		49	51	52							258		258
55	50	47		56	55	43							251		251
56	49	50		49	51	51							250		250
57	54	54		57	55	48							268		268
58	50	47		51	54	53							255		255
59	51	53		54	51	50							259		259
60	50	50		43	43	50							236		236
61	54	52		50	53	54							263		263
62	49	52		54	51	46							252		252
63	49	49		47	48				53				246		246
H 1	54	52		51	51				50				258		258
2	52	51		49	53				53				258		258
3	45	49		51	51				54				250		250
合 計	2866			2842		1409		229	210	328		189	7556	517	8073

卒 年	業 次	全 日 制					合 計
		普 通 科					
		L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₅	
S	27	37					37
	28	30					30
	29	39					39
	30	47					47
	31	58					58
	32	42					42
	33	50					50
	34	50					50
	35	60	55				115
	36	55	54				109
	37	55	53				108
	38	51	55				106
	39	59	56				115
	40	63	64	60			187
	41	63	64	63	65		255
	42	60	63	64	62		249
	43	58	56	58	58		230
	44	60	53	53	51		217
	45	55	57	57	57		226
	46	54	51	54	57	54	270
	47	49	49	50	49		197
	48	54	54	54	53		215
	49	52	52	55	48		207
	50	51	50	51	51	50	253
	51	53	53	54	52	42	254
	52	52	54	53	51	52	262
	53	52	51	53	52	52	260
	54	55	55	56	56	49	271
	55	54	53	55	54	50	266
	56	47	49	49	49	47	241
	57	53	51	54	52	48	258
	58	51	50	51	51	52	255
	59	50	49	49	50	51	249
	60	47	46	46	45	43	227

卒業 年次	全 日 制							合 計
	普 通 科							
	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₅	L ₆	L ₇	
S 61	46	47	45	47	47	46		278
62	54	53	54	54	52			267
63	47	46	47	47	47	48		282
H 1	28	47	46	47	46	47		261
2	30	49	49	47	47	47	25	295
3	26	49	49	49	45	45		267
合 計	1997	1688	1429	1354	879	233	25	7605

学校・学科・卒業年次別担任・クラス委員一覧

高等学校は学制改革による、校名変更や学科名変更等により、複雑なクラスわけとなっております。

現在437のクラスがありますが、約80クラスの委員が決定していません。まだクラス委員の決定していないクラスの皆様は是非この機会にクラス委員を決定していただけるよう御協力御願ひ致します。

また、昭和57年より高等学校同窓会会則改訂により1クラス、2名のクラス委員となりました。

なお、クラス委員は、各クラスの代表としてクラスと高校同窓会・校友会・高等学校とのパイプ役をお願いしています。委員の方には大きな負担をおかけしていますが、委員の同窓会活動では大変重要な役目です。会員の皆様方も御協力よろしくお願い致します。

【凡 例】

18	堤 良富	・上段 クラス担任
	渡辺 和正	・下段 クラス委員

卒業 年次	電機第一工業学校				電機第二工業学校			
	第1本科		第2本科	併設中学	第1本科		第2本科	併設中学
	電気科	機械科	電気科		電気科	機械科	機械科	
	E	M	E		E	M	M	
S 17			稲垣 忠雄					
			佐々嶋長治					
18	堤 良富		清水 明					
	渡辺 和正		豊田 健造					
19								
20	清水 明		清水 明					
	高野 新吉		池ヶ谷道夫					
21	清野 明夫		作道 兵次					
	倉持 悦久		中村 政雄					
22			服部 三郎			加藤 高治		
			粟屋 昭					
23	清水 明		吉田 宇一		磯部 直吉 原口 喜八 深海登世 金森	早川 喜知	伊藤 克己	
	青木 仁		蛭間 恵治		木下 務			
24	清水 明	首藤 富家	吉田 宇一		原口 喜八	首藤 富家		
	中田 勇	常広 武雄	鈴木 治郎		戸井田 豊			

卒業 年次	定 時 制					
	電 気 科	機 械 科	電 気 科			
			電 力 課 程		電 気 機 器 課 程	電 気 通 信 課 程
			E ₁	E ₂	M	C
S 24	吉田 宇一	伊藤 克己				
	小竹 四郎	横山 実				
25			服部 三郎	吉田 宇一		
				鈴木 治郎		
26			鈴木 徳三	鈴木 徳三	伊藤 克己	原口 喜八
			荒井美喜男		小沢 位	
27			横田良次郎	鈴木 徳三	伊藤 克己	原口 喜八
				駒形 昌雄		小林 建雄
28			河部 貞夫		首藤 富家	森田 恒久
			佐藤 守弘			
29			鈴木 徳三		首藤 富家	角田 秀夫
			関根 章		北風 康夫	森 真
30			河部 貞夫		横田良次郎	板垣 光夫
			宮田 利一		松本 和夫	菅野 敬弘
31			小針 藤男		首藤 富家	角田 秀夫
						大沢 和夫
32			河部 貞夫		大渡 正治	板垣 光夫
			茂木 実		吉川 洋	
33			小針 藤男		大渡 正治	角田 秀夫
			尾身 龜吉		与儀 正久	
34			角川 一治		小針 藤男	中島 輝夫
						椎津 利雄
35			角川 一治		大渡 正治	中島 輝夫
			高島 清淳			池田 恒男
36			桜井 松治		横田良次郎	中島 輝夫
			野村 力男			浜川 坦
37			杉野 良知		桜井 松治	横田良次郎
			石崎 泰司		黒田 忠治	宮城 一治
38			杉野 良知		下崎 和彦	大江 康男
			上倉 幸男		安藤 忠	中山 勇次
39			大江 康男		吉田 宇一	白川 守昭
						坂本 寛
40			吉田 宇一		下崎 和彦	松岡 三夫
41			見崎 正行	則友 克敏		長谷川裕一
						小杉 喜美

卒業 年次	定 時 制		
	電 気 科		電 子 科
	E ₁	E ₂	D
S 42	旗 将	山崎 修快	鈴木 治郎
43	高久 広毅	人見 芳行	鈴木 治郎
	加賀 勉	厚谷 豊	井筒 幸二
44	鈴木 治郎		人見 芳行
	大石 四郎		
45	鈴木 治郎		鈴木 治郎
	金子 英司		兼添 和昭
46	鈴木 治郎		鈴木 治郎
			石川 秋男

卒業 年次	全 日 制								
	電 力 課 程			電 気 機 器 課 程		電 気 通 信 課 程		電 気 計 測 課 程	
	E ₁	E ₂	E ₃	E ₄	M ₁	M ₂	C ₁	C ₂	I
S 25	高橋 源八	岩佐 徹			首藤 富家		角田 秀夫		
	中田 勇	戸井田 豊			常広 武雄		森山 満隆		
26	野口 茂	大江 康男	吉田 宇一	加藤 高治	佐藤 善慶		中島 輝夫		
	加藤 正樹			中島 政良	山川 保		早川 宏		
27	平野 三郎	大渡 正治	林 六郎		中沢 (清藤) 実	板垣 光夫	桜井 松治		
	新井 昭男	岩田 慶一	小島 輝一		今井 昇	横山 真一	野瀬 健一		
28	野口 茂	角田 秀夫			桜井 梯二郎		鈴木 藤男		
	橋本 光男	青木 良造					渡辺 正行		
29	小西 吉孝	佐藤 善慶			中沢 (清藤) 実		中島 輝夫		伊藤 克己
		渡辺 勉					荻野 宏泰		尾島 崇弘
30	林 六郎	神庭 明			大渡 正治	吉田 宇一	桜井 松治		大江 康男
		石塚 武夫			小野 栄一		柴山 茂男		保坂 弘
31	杉野 良知	野口 茂			鈴木 徳三		吉田 孝俊	伏見栄治郎	伊藤 克己
	原口 尚久						森 健輔	坂井 孝志	小長谷 登
32	角川 一治	桜井 梯二郎			中沢 (清藤) 実		中島 輝夫	寺尾 功吉	佐藤 善慶
	倉林 純一						増田 克己	柳 博	松本 徳孝
33	板垣 光夫	渡辺 明			吉田 宇一		桜井 松治	横田良次郎	大江 康男
	飛田 偉靖				後藤 隆夫				
34	杉野 良知	鈴木 徳三			中沢 (清藤) 実		野口 茂	吉田 孝俊	伊藤 克己
		高橋 清			松下 祐輔				中野 善夫
35	佐藤 吉弥	吉田 宇一			鈴木 治郎		角田 秀夫	佐藤 善慶	大江 康男
	北村 義明	名古屋 勲			鈴木 整司		見崎 正行	渡辺 黎一	
36	板垣 光夫				小針 藤男		佐藤 善慶	白井光太郎	伊藤 克己
								日比野靖昌	藤田 安彦
37	野口 茂				斉藤 広吉		大渡 正治	角田 秀夫	石川 孝志
	荒井 義久						柳田 佳孝	横溝 邦彦	
38	大田 健	吉田 宇一			横山 実		鈴木 治郎		伊藤 克己
	形屋 憲一	佐藤洋志郎					細田 勝久		鶴見 勝義
39	中島 輝夫				小針 藤男		高木 正夫	白井光太郎	渡辺 太
								三橋 慶二	渡辺 正行
40	中村 広幸				斉藤 広吉		桜井 松治	菊地 諒	伊藤 克己
								川村登志一	倉本 馨

卒業 年次	全 日 制								
	電 気 科			電 子 科		機 械 科		工業計測科	
	E ₁	E ₂	E ₃	D ₁	D ₂	M ₁	M ₂	I	
S 41	大田 健	大田 健		角田 秀夫	鈴木 治郎	横山 実		中田 勇	
	石附 正				印宮 登	渡辺 高幸		莊司 仁	
42	松岡 三夫	加藤 栄治	宮崎 登	白井光太郎	川島 純一	伊藤 克己		大江 康男	
	原 邦男		畑山 昭一	平賀 徹		川田 純		新山 恒夫	
43	斉藤 成信	中村 広幸		桜井 松治	菊地 諒	斉藤 広吉		渡辺 太	
		和田 真一		杉本 好造					
44	中村 隆一	中田 勇		高村 広昭	見崎 正行	横山 実		大江 康男	
	赤川富美樹	山越 茂雄		花嶋 秀年	菊嶋 和則	岡田 和恭		由井 康雄	
45	宮崎 登	加藤 栄治		白井光太郎	川島 純一	松岡 三夫	横山 実		
	酒井 明	岡本 清次		松村 雅之	小川 晴夫	小野 喜之	鳥飼 洋一		
46	大田 健	中村 広幸		白井光太郎	高村 広昭	石川 孝志	伊藤 克己		
	川本 敏	秋山 清隆		石橋 和夫		田畑 有三	阿部 俊		
47	鈴木 治郎	渡辺 太		見崎 正行	中村 隆一	大江 康男	山田 宏明		
	大橋富士人	山田 宏己		早坂 幸雄	持木 文男	谷田部 宏	船田 嘉章		
48	宮崎 登	加藤 栄治		松岡 三夫	川島 純一	大湯 幸夫	横山 実		
	山内 利夫	尾身 栄一		日野 一武	渡辺 敏章	林 達也	大羽 克己		
49	間辺幸三郎	高橋 源八		白井光太郎	大谷 稔	高村 広昭	中村 広幸		
		山口 孝博		高橋 康一	岡田 孝治		石塚 仁史		
50	高橋 源八	中村 隆一		見崎 正行	前嶋 万人	大湯 幸夫			
	高瀬 裕司	杉浦 義彦		大谷 茂	佐藤 仁	高瀬 勝義			
51	宮崎 登	鈴木 博		五十木基晴	大江 康男	横山 実			
	平井 広史	神田 庄一		柳川 守	吉田 邦男	池田 邦明			
52	間辺幸三郎	高村 広昭		菊地 諒	大谷 稔	横 将			
		大塚 徹		村上 裕一	前嶋 宏二	海川 次郎			
53	鈴木 博	中村 隆一		見崎 正行	宮本 治	大湯 幸夫			
	後野 明仁	相川 次男		秋山 益満	清水 敏久	本間 昭伸			
54	宮崎 登	田上 光治		前嶋 万人	大谷 稔	横山 実			
	箱田 浩二	吉田 俊司		三輪 浩康	山際 康之	平澤 輝男			
55	松岡 三夫	津村 栄一		菊地 諒	高村 広昭	横 将			
	石井 和之	手塚 勝		山田 富夫	稲川 秀勝	小林 正一			
56	鈴木 博	中村 隆一		見崎 正行	林 幸男	横山 実			
	鈴木 幸治	山崎 育昭		鈴木 昭広	新谷要次郎				
57	斉藤 広吉	則友 克敏		前嶋 万人	生熊 勝彦	山田 宏明			
	滝沢 聡	天野 裕一		平沢 一寿	今尾 裕	早坂 勝浩			
58	鈴木 治郎	津村 栄一		見崎 正行	人見 芳行	山路 雅一			
	福原 幸規	木村 武晴		山崎 誠人	富井 清隆	江部 智治			
59	鈴木 博	高村 広昭		向芝 京太	石川 孝志	横山 実			
	浅田 直樹	亀岡 和裕		大曾根康史	土屋 岳剛	鈴木 久郎	正成		
	在藤 和幸	星野 雅幸		松田 和哉	松本 剛	鈴木 正成			
	斉藤 広吉	大田 健		渡辺 太	前嶋 万人	小峯 龍男			
60	青沼 孝一	宮崎 佳之		安井 哲也	染野 明	猪鼻 一芳			
	深見 孝一	野本 浩		石井 俊一	笠木 孝夫	岩崎 道義			

卒業 年次	全 日 制					
	電 気 科		電 子 科		機 械 科	電子機械科
	E ₁	E ₂	D ₁	D ₂	M ₁	M ₂
S 61	津村 栄一	鈴木 治郎	見崎 正行	生熊 勝彦	宮本 治	
	中村 登	西井 光利	嶋島 浩	大和田 誠	新井 智也	
	河又 信司	亀田 秀明	増喜 太郎	松下 慎一	山岸 岳人	
62	斎藤 広吉	渡辺 太	中村 隆一	妹尾 敬	大湯 幸夫	
	石田 亮	館澤 直紀	豊島 徹朗	寺島 大	村井 潤	
	近藤 大輔	木村 宏	田中 篤史	児玉 泰輝	山本 克郎	
63	大田 健	川口 純	前嶋 万人	五十木基晴		小峯 龍男
	藤本 賢司	石田 晋也	星野 信幸	川勝 真喜		佐藤 秀明
	村田 周也	石山 隆	田口 明洋	永木 康弘		柳澤 恵行
H 1	中田 勇	津村 栄一	見崎 正行	内山 章夫		古城 仁
	桜井 寿弥	西野 英一	池田 靖規	清水 憲一		白川 恵悟
	清田 昌紀	渡辺 浩成	関根 康史	矢澤 哲弘		藤代 慎治
	鈴木 治郎	妹尾 敬	中村 隆一	上前 隆雄		大久保 靖
2	佐々木武志	草野 健一	飯田 正樹	中島 浩一		玉手 秀典
	戸塚 敏朗	高木 道夫	綱藤 智	徳田 信康		野見 貴行
3	大田 健	河野 吉伸	見崎 正行	深谷哲弘		小峯 龍男
	甘利 友朗	落合 崇	前田 隆	村社 敏夫		石沢 岳彦
	佐藤 淳	高橋 好晴	松本 信寛	渡辺 永寿		久保田恭弘

卒業 年次	全 日 制				
	普 通 科				
	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₅
S 27	青木 成宗 新井良二郎				
28	吉田 孝俊 諸橋 弘之				
29	宮本 敏雄 川西 康夫				
30	平野 三郎 大森 雄一				
31	佐藤 吉弥 黒岩 藩				
32	大久保芳随				
33	神庭 明				
34	伏見栄次郎				
35	大久保芳随 鈴木 恭雄	北原 泰彦 前嶋 万人			
36	神庭 明 相川 祐三	大渡 正治 植田 正昭			
37	伏見栄次郎 五島 奉文	吉田 孝俊 藤田 明也			
38	大久保芳随 加藤 計夫	伏見栄次郎 我妻 功規			
39	神庭 明	板垣 光夫			
40	吉田 孝俊 渡辺 貞綱	伏見栄次郎 高崎 新平	平野 三郎		
41	大渡 正治 草間信一郎	杉野 良知 野村 仁	石川 孝志 村田 陽一	大久保芳随 松井 努	
42	中島 輝夫 光木 保臣	山田 宏明 戸江 栄一	磯部 昭二 大館 敏夫	白川 守昭	
43	神庭 明 上原 博通	石川 孝志 宮沢 秀実	板垣 光夫 六反田和幸	吉田 孝俊	

卒業 年次	全 日 制				
	普 通 科				
	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₅
S 44	山田 宏明 中村 悟	磯部 昭二 杉山 行男	中村 圭佑 渡辺 洋一	大久保芳随 木伏 明人	
45	中島 輝夫	五十木基晴	則友 克敏 菱田 豊彦	白川 守昭	
46	杉野 良知	横 将	板垣 光夫 本居 幸治	高久 広毅 嵯峨崎孝吉	茂木 雅博
47	大久保芳随	磯部 昭二 三宅 清	斉藤 成信 浅見 正一	高久 広毅	
48	中島 輝夫 明石 弘一	人見 芳行 木村 晴彦	則友 克敏 佐藤 孝雄	白川 守昭	
49	杉野 良知 半田 孝	板垣 光夫 中台 淳一	石川 孝志 新井 建也	茂木 雅博 藤田 清	
50	杉野 良知 黒田 正人	磯部 昭二 川島 正春	斉藤 成信 古城 仁	高久 広毅 山田 宏明	
51	石川 孝志 松丸 昭彦	則友 克敏 安藤 政旦	人見 芳行 石井 正一	松岡 三夫 種田 光利	林 幸男 柴山 仁
52	神庭 明 増田 桂一	白川 守昭	板垣 光夫 小野木広行	中村 広幸 石渡 上	茂木 雅博
53	杉野 良知	中村 圭佑 目黒 香一	松岡 三夫 松岡 俊和	高久 広毅 相原 浩一	斉藤 成信 遠藤 史郎
54	石川 孝志 宮木 真人	則友 克敏 小山 洋一	磯部 昭二 小出 修男	生熊 勝彦 坂本 尚孝	板垣 光夫
55	大江 康男 本橋 功次	斉藤 成信 花房 勤	人見 芳行 貴田真一郎	林 幸男 瀬賀 幸一	茂木 雅博 生方 健二
56	五十木基晴 大館 昭彦	中村 圭佑 沢田 勉	宮本 治 吉水 雅彦	高久 広毅 糸川 剛	白川 守昭 道伝 弘昌
57	大谷 稔 木村康二郎	田上 光治 山瀬 智晴	磯部昭二 小林良太郎	石川 孝志 小野寺智幸	板垣 光夫 飯塚 美治
58	大江 康男 岩本 健	石井 和之 及川 俊也	高村 広昭 飯田 公司	横 将 岩井 厚	松岡 三夫 長堀 岳治
59	宮本 治 鈴木 幹也	吉場 章二 内藤 剛	高久 広毅 松島 克幸	大谷 稔 藤原 国之	白川 守昭 加藤 剛
60	宮田 向 高田 寛	剛史 高田 茂春	松島 克幸 真一 政宏	藤原 国幸 小宮山敏樹	加藤 剛 今中 繁義

卒業 年次	全 日 制						
	普 通 科						
	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₅	L ₆	L ₇
S 61	古城 仁	則友 克敏	田上 光治	横 将	吉場 章二	飯島 稔	
62	小俣 憲一 藤森 白川	海老沢 浩 西木 章員	青木 規夫 服部 義郎	岩見田慎也 志村 祐幸	木齊 央 山田 賢二	安達 三博 横田 昇	
63	大畑 和彦 渋谷 晴康	佐々木 徹 森田 正明	佐藤 憲一 永井 智人	高橋 宏明 平石 真行	塚田 乙 長谷川一之		
H 1	大石 洋治 坂本 和規	中西 勇人 小野 裕三	入江 睦也 橋本 武洋	青木 健 石井久仁彦	小暮 忠 神保 秀樹	小山 秀樹 永瀬 裕晃	
2	白川 守昭	山崎 武光	高久 広毅	宮本 治	生熊 勝彦	川口 純	平山 桂樹
3	小山 克也 佐伯裕次郎	服部 正樹 林田 英明	河相 崇 村松 信秀	青木 義幸 中山 博	遠山 竹司 中村 孝一	田中 典明 針田 圭	高月 陽介 西山 隆
	斎藤 成信	人見 芳行	高村 昭昭	八百屋尚志	則友 克敏	山崎 晴康	
	高田 忍 和田 崇秀	沢田 和也 鈴木 勇	多胡 真直	大島 直樹 山外 知一	浅野 貴行 大月 直哉	桜井 隆雄 藤井 宜彰	

平成2年度事業報告

事業種別	日付・場所・内容	出席者等
創立30周年 記念事業	平成2年6月23日(土) 記念講演 於：小石川校舎実演室 講師 矢迫純一氏 「宇宙人は実在する!？」 記念祝賀会 於：後楽園会館	163名
総 会		
同窓会誌の 発行	同窓会誌「朋友」1990年版の発行 クラス委員名簿改訂版(12)の発行	3月4日
教職員・ クラス委員 懇談会	平成2年9月22日 於：斎徳亭 教職員・クラス委員と懇談 同窓会・高等学校後援会・校友会 への支援要請 小金井校舎建設募金の協力要請	教職員 10名 来 賓 1名 クラス委員 13名 幹事 12名
新会員 説明会	平成3年3月6日 於：小石川校舎体育館 新会員に高等学校同窓会活動説明	終業式場にて 新会員 518名
新クラス委 員懇談会	平成3年3月6日 於：小石川校舎会議室 新クラス委員となる人と幹事の懇 談会。同窓会活動への協力要請	教職員 22名 新クラス委員 4名
入学記念品 および 卒業記念品 の贈呈	平成2年4月7日 入学式 於：九段会館 ネクタイピン 平成3年3月8日 卒業式 於：九段会館 証書挟み、南部鉄製鍵形校抜き	入学式 印宮会長出席 卒業式 大塚会長出席
クラス会開 催の補助	クラス会を開催するクラスに補助 金として5,000円を支給	34クラス
準会員活動 奨励	平成2年9月22日 電高祭優秀展示作品奨励 優秀賞1部門、奨励賞3	
準会員活動 援助 (校友準会 員事業基金 の運用)	平成2年9月26日 於：小石川運動場 ○体育祭のクラス別対抗表彰 全員に参加賞の配布 平成3年2月5日(火) 於：江戸川区総合文化センター ○第12回文化講演会 題：映画を楽しく面白く鑑るた めに 講師 白井佳夫先生 平成3年3月6日 於：小石川校舎体育館 終業式 ○クラブ活動優秀者の表彰	
第5回卒業 生招待会の 協力	平成2年11月10日 於：後楽園会館 卒業生招待会の協力	卒業生 来 賓 140名
募金活動の 推進	小金井校舎建設募金活動の推進	委員会に参加

同窓会の

高等学校

名誉会長 宮 崎 登
会 長 大 塚 忠 克
副 会 長 須 賀 寛 光
" 向 芝 京 太

平成2・3年度役員

職 務	氏 名	卒年	居住地
幹 事	豊 田 健 造	18	小 平 市
"	野 口 成 治	18	千 葉 市
"	阿久津 功	23	市 川 市
"	今 田 正 武	24	武 蔵 野 市
"	鈴 木 治 郎	24	新 座 市
"	宇 野 敬 助	27	柏 市
"	柴 山 茂 男	30	横 浜 市
"	小長谷 登	31	横 浜 市
"	松 下 祐 輔	34	朝 霞 市
"	日比野 靖 昌	36	文 京 区
"	大 塚 忠 克	39	浦 安 市
"	渡 辺 喜 平	39	藤 沢 市
"	北 尾 義 弘	40	相 模 原 市
"	印 宮 登 太	41	江 戸 川 区
"	向 芝 修 一	48	新 座 市
"	平 古 城 一 仁	49	新 座 市
"	鈴 木 元 樹	50	相 模 原 市
"	鈴 木 元 樹	54	市 川 市
会計監査	横 山 真 一	27	船 橋 市

平成2年度決算報告

自 平成2年4月1日
至 平成3年3月31日

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
入 会 金 3600円×554名	1,994,400	創立30周年事業記念事業費	927,436
補 助 金	200,000	記 念 講 演 費	100,000
利 子 ・ 配 当 金	360,408	記 念 祝 賀 会 費	827,436
雑 収 入	85,000	事 業 費	1,446,771
		総 会 費	57,621
		教職員・クラス委員懇談会費	152,815
		ク ラ ス 会 補 助 金	185,000
		卒 業 記 念 品 費	181,173
		同窓会誌製作発行費	820,162
		新クラス委員懇談会費	0
		準会員活動奨励費	50,000
		会 議 費	286,198
		事 務 通 信 費	106,372
		諸 費	198,618
		予 備 費	261,723
小 計	2,639,808	小 計	3,227,118
前期繰越金	887,552	次期繰越金	300,242
合 計	3,527,360	合 計	3,527,360

活動報告

同窓会役員

参与 鷲 見 篤 23年卒
" 谷 沢 正一郎 23 "
" 野 瀬 健 一 27 "
" 加 藤 康太郎 29 "
" 賀 張 雅 弘 31 "

平成3・4年度役員

職 務	氏 名	卒年	居住地
幹 事	佐々嶋 長 治	17	北 区
"	池ヶ谷 道 夫	20	市 川 市
"	清水 岩 生	20	世田谷区
"	海老原 宮 一	23	浦 和 市
"	中 村 広 幸	24	市 川 市
"	北 風 康 夫	29	太 田 区
"	間 川 清 太 郎	29	飯 能 市
"	見 崎 正 行	35	秦 野 市
"	萩 原 宏 芳	35	川 口 市
"	石 崎 泰 司	37	江 戸 川 区
"	渡 辺 敏 章	48	北 葛 飾 郡
"	須 賀 寛 光	49	越 谷 市
"	山 口 孝 博	49	町 田 市
"	河 野 吉 伸	53	大 宮 市
"	内 山 章 夫	54	船 橋 市
"	池 田 秀 浩	54	中 央 区
会計監査	加 藤 栄 治	30	川 越 市

平成3年度予算

自 平成3年4月1日
至 平成4年3月31日

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
入 会 金 3600円×517名	1,861,200	事 業 費	2,060,000
補 助 金	50,000	総 会 費	500,000
利 子 ・ 配 当 金	360,000	教職員・クラス委員懇談会費	200,000
雑 収 入	100,000	ク ラ ス 会 補 助 金	250,000
		卒 業 記 念 品 費	350,000
		同窓会誌製作発行費	650,000
		新クラス委員懇談会費	10,000
		準会員活動奨励費	100,000
		会 議 費	250,000
		事 務 通 信 費	100,000
		諸 費	100,000
		予 備 費	161,442
小 計	2,371,200	小 計	2,671,442
前期繰越金	300,242	次期繰越金	0
合 計	2,671,442	合 計	2,671,442

財産目録

平成3年3月31日現在

項 目	内 容	金 額
基 本 財 産 (1)	東 京 電 力 社 債	5,000,000
基 本 財 産 (2)	中 期 国 債 フ ァ ン ド	0

平成3年度事業計画

事業種別	内 容	日 時
総 会	於：小石川校舎実演室 1.平成2年度事業報告、決算報告、会計監査報告の承認 2.平成3年度事業計画案、予算案の審議及び承認。 3.役員の変更 4.その他 小金井校舎建設募金の協力要請	平成3年 6月15日 (土)
同窓会誌の 発行	同窓会誌「朋友」1991年版の発行 クラス委員名簿改訂版(13)の発行	平成3年度 発行
クラス委員 の委嘱	クラス委員に委嘱状と承諾書の発送・回収	平成3年5月
教職員・ クラス委員 懇談会	教職員・クラス委員と懇談 同窓会・高等学校後援会・校友会への支援要請 小金井校舎建設募金の協力要請	平成3年9月
新会員 説明会	於：小石川校舎体育館 新会員に高等学校同窓会活動説明	終業式場にて 平成4年3月
新クラス 委員懇談会	新クラス委員となる人と幹事の懇談会。同窓会活動への協力要請	平成4年3月 終業式後
入学記念品 卒業記念品 の贈呈	入学記念品として、 ネクタイピン 卒業記念品として、 証書挟み、南部鉄製鍵形校抜き 校友会と共催	平成3年4月 入学式 平成4年3月 卒業式
クラス会 開催の補助	クラス会を開催するクラスに補助金として5,000円を支給 (他に、校友会より10,000円と、往復ハガキ、学校法人より5,000円が支給される)	随 時
準会員活動 の奨励	電高祭優秀展示作品の奨励 クラブ活動、文化活動の奨励	
準会員活動 援助 (校友準会 員事業基金 の運用)	体育祭、文化講演会、クラブ活動等の活動援助 (校友会準会員事業基金の運用)	
第6回卒業 生招待会の 協力	卒業生招待会(ホームカミング)の協力	
募金活動の 推進	小金井校舎建設募金活動の推進取組み	

東京電機大学高等学校同窓会会則

第1章 名称及び事務所所在地		することが出来る。但し、任期は前任者の残任期間とする。	
第1条	本会は東京電機大学高等学校同窓会と称す。	第5章 会 合	
第2条	本会は事務所を東京都千代田区神田錦町1-4 東京電機大学校友会に置く。	第9条	総会は毎年1回会長はこれを召集し本会の事業経過計 画案、幹事及び会計監査の承認、収支決算予算案の報 告並びに議決をおこなう。
第2章 目 的		第10条	幹事会は、会長、副会長、幹事から成り、必要に応じ て会長はこれを召集し、会務を審議決定する。
第3条	本会は会員相互の親睦を図り併せて会員と母校との連 繫を密にし東京電機大学校友会の事業遂行に協力する を以て目的とする。	2	クラス委員会、地域委員会は、それぞれクラス会、及 び地域同窓会の要望事項を協議し、幹事会に提案す る。
第3章 会 員		3	クラス会、地域同窓会及びその他の会は随時に開催出 来る。
第4条	本会の会員は特別会員、正会員、準会員よりなる。	各会を開催した場合は会長に結果を報告する。	
2	特別会員は東京電機大学高等学校の教職員及び本会に 特に功労あるものにして幹事会の推薦によるもの。	第11条	幹事会の議決は出席人員の過半数の賛成が必要であ る。
3	正会員は東京電機大学高等学校、東京電機工業学校、 電機第一工業学校、同併設中学校、電機第二工業学 校、同併設中学校、電機学園高等学校の卒業生とす る。	第12条	本会の事業遂行上必要あるときは、幹事会の議決によ り次の会を設けることが出来る。これに関する規約は 別に定める。
4	準会員は東京電機大学高等学校の在學生とする。	一 特別運営委員会	
第5条	特別会員、準会員は議決権、選挙権、被選挙権を有し ない。	第6章 会費及び会計	
第4章 役 員		第13条	本会に入会するものは入会金1,500円を納入する ものとする。
第6条	本会には次の役員を置く。	2	本会の会費は東京電機大学校友会費の納入を以てこ れを認める。
一	名誉会長1名	第14条	諸会合に要する経費は、その実費を徴集することが出 来る。
二	顧問若干名及び参与若干名	第15条	会計監査は、本会の会計を監査する。
三	会長1名、副会長2名、及び幹事25名以上50名以内、 会計監査2名	第16条	本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月末 日に終る。
四	クラス委員を各クラス2名、地域委員を各地域同窓会 1名をおくことができる。	第7章 会則の改正その他	
第7条	名誉会長、顧問、及び参与は本会の求めに応じて意見 を述べる事が出来る。	第17条	本会則の改正は総会の議決を要す。
2	会長は本会を代表し、会務を総括し、幹事会の議長と なる。	付 則	
3	副会長は会長の任務の補佐をし、会長事故ある時はこ れを代行する。	1	本会則は昭和35年4月17日より施行する。
4	幹事会は会務を分担し、会の運営に当たる。	2	昭和46年5月15日第6条四項一部改正
5	地域委員は地域同窓会を、クラス委員はクラス会を開 催し、会との連絡を緊密にし、会の発展を図る。	昭和47年6月27日第6条一項一部改正	
第8条	幹事及び会計監査の任期は2年とし、毎年半数を改選 する。但し再任を妨げない。	昭和50年6月7日第13条一項一部改正	
2	前項以外の役員の任期は一年とし再任を妨げない。	昭和56年6月27日全面改正	
3	役員に欠員を生じ、会の運営に支障あるときは補充を	昭和57年6月26日第13条一項一部改正	

東京電機大学高等学校 同窓会会則細則

第1条	名誉会長には東京電機大学高等学校長を推戴する。	6	特別運営委員は幹事会の推薦により定める。
2	顧問は特別会員の中から、参与は会員の中から幹事会にて推薦する。	第2条	幹事は、その互選により会計係、庶務係を定める。
3	会長及び副会長は幹事会の互選で定める。	第3条	本細則の改正は幹事会の議決を要する。
4	クラス委員はクラス会より選出する。	付 則	
5	地域委員は、地域同窓会より選出する。	1	本細則は昭和35年4月17日より施行する。
		2	昭和56年6月27日全面改正

編集後記

現在高等学校がある小石川校舎も、いよいよ今年かぎりとなりました。来年4月からは小金井の新キャンパスが開校になります。新校舎は急ピッチで建設が進められているところですが、本号はその小金井新校舎について特集してみました。幸なことに、小金井校舎建設本部長の菊地諒先生と小金井校舎チーフデザイナーで、(株)山下設計の南三一郎さんよりご寄稿いただき、その設計・建設に当たったのコンセプトや苦労話について詳しく述べていただきましたが、いかがだったでしょうか。

神田、小石川それぞれのキャンパスで高校時代を過ごされた同窓生の皆様も、小金井キャンパスからやがて巣立つ新世代の仲間と、新校舎の未来をあたたく見守っていただければと思います。

[編集担当] 柴山茂男・向芝京太・須賀寛光・古城 仁
内山章夫・河野吉伸・串橋幸保

平成3年10月31日 発行 (非売品)

[編集兼発行所]

東京電機大学高等学校同窓会
住所：東京都千代田区神田錦町1の4
東京電機大学校友会内
電話：03-3294-1551 (代)

東京電機大学高等学校
住所：東京都文京区後楽1-7-26
電話：03(813)6911 (代)